

人間関係全体の変化としての保育実践論

齋 藤 美智子

ECEC Practice through Changes in Human Relationships

Michiko Saito

Abstract

The author has made a career as a nursery teacher for nearly 40 years and practiced ECEC (Early Childhood Education and Care). What is ECEC practice in the first place? In retrospect, ECEC practices include unexpected developments, encounters with people, feelings of joy in supporting human relations, and a sense of unexpected energy gushing out.

The purpose of this article is to explore how to draw such practices in real life. As a method, the author analyzed the change of practices in two ECEC settings in the 1990s. The following conclusions were reached : ① The change of ECEC practices is deeply influenced by historical and social changes. ② The relationship between practitioners and parents was changed from “facing each other” to “side-by-side.” ③ For practitioners, the relationships with children and with their parents are simultaneously changed and closely correlated.

Key words : ECEC practices, Parents, Relationship, Supporting people

第1章 研究の目的と方法

1, 問題関心

筆者は、幼稚園教諭を2年経験し、1980年開園の認可保育園で保育者としてスタートしている。20年のクラス担当保育士、主任4年、園長10年、地域子育て支援センターと関わって2年と40年近くの保育者人生を歩んできた。

この間の時代の流れを実感しつつ保育をすすめてきたのかと問われたら、そうともいえない自分がある。とにかく、目の前にいる子どもたちへの対応で精一杯という時期が続き、そのときどき、子どもの成長を気遣う親から投げかけられる言葉に揺れ動いていたように思う。「子どものからだがおかしいのではないか」「当たり前の生活が出来なくなっている」などの時代的課題を与えられても、まずは子どもとの関係作りがうまくいかないことには始まらなかったのである。

子どもの発達のこと、保育内容についてなど、学べき事が山積していることに押しつぶされそうな日々を送っていた。楽しい保育を作り出すために、どうしたらいいのかという悩みになるまでも、時間がかかった。子どもとの関係がうまくいかないのは、保育者の力量だけではないという気づき方をするのには、数年かかった。

親に対して「こうしてほしい」と言い切るには、一定の保育力量があつてのことだと考えていた。また、親の生活のたいへんさを思い巡らせながらの対応もむずかしかった。

その発想が「保護者から学ぼう」というふうに変換したのは、保育者歴10年が過ぎた1990年代である。そして、「保護者とともに学ぶ」というスタイルとなり、同じ働く女性として、「お互いに対等な関係のなかで共同していく方向をめざす」保育実践を進めたいと思うようになった。

そもそも保育実践とは、何であろうか。振り返ってみると、保育実践には、予想外の展開があり、出会いがあり、人間関係の中で支え合うことで喜びを感じ、思わぬエネルギーが湧き出すものである。そんな保育実践をどうやったらリアルに描くことが出来るのだろうか。人間的感情を持った生き生きとした関係性の中で、「変化・発展」するものとしての実践のとらえ方はないのだろうか。

2018年4月から新しい保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、そして幼稚園教育要領が同時に改定された。もっとも注目されるべきことは、いずれにも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が提示されたことである。保育とは、目の前の子どもたちからスタートするものだと思う。あるべき論による保育は、子どもたちの豊かな育ちを削ぐものとはならないだろうか。現実の目の前の5才児の姿を思い浮かべれば、この「育ってほしい姿」は、なんとハードルの高いものであろう。あの90年代「荒れる子、キレる子」「学級崩壊」等とマスコミでも取り上げられた子どもたちの年齢である。「年々子どもたちが幼くなっている」というのは、保育現場の実感である。あまりにも大人側からの目標の提示ではないだろうか。深い子ども理解に基づいたものとは、到底思えない。どんなに世界規模のレベルに追いつこうとあせっても、育ちそびれているところには、丁寧な保育の手立てが必要なのである。子どもが育つには、時間と手間がかかる。このことを軽視した保育・子育ては、子どもたちの発達をますますゆがめてしまうことにならないだろうか。今回の改訂の基本的考え方である「カリキュラム・マネジメント」や「PDCAサイクル」という企業経営的な発想から作られた評価方式は、保育実践には最もなじみにくいものとする。保育実践には、子ども、保護者、保育者三者が主体的に関わり合うことで生まれる予想外の展開があり、計画、予測に収めきれないものがある。筆者は、そこに保育の魅力を感じて、保育者としての人生を歩んできたのである。

2. 保育実践論に関する先行研究

(1) 保育学会「保育学講座」における保育実践論

40年ぶりに刊行された日本保育学会編集「保育学講座」をもとに、今日における一般的、代表的な保育実践論から榎沢良彦、中坪史典を取り上げる。

両者に共通している第一の点は、保育実践の中心問題をもっぱら、保育者と子どもとのかかわりとしてとらえているということである。例えば、榎沢^[1]は、「保育は乳幼児の存在の仕方に即し、子どもという存在を要素に還元することなく全体的に育てようとする教育のあり方であり、かつ子どもと保育者の関係のあり方までも含んだ概念」であり、「保育とは保育者が子どもと共に生き、子どもと心情を交流することを通し、子ども自身が主体的に生き、その結果として全体的に発達していくことを促すいとなみ」、中坪^[2]は、「保育実践の出発点は、保育者の子ども理解にある。」としている。

しかし、私の保育者としての体験・実感から言えば、「保育者が子どもと共に生きる」ことは、子どもとのかかわりと同じくらい保護者とのかかわりが保育の中心にある。子どもの存在をもっと社会的な存在として考えてきた。そうでなければ保育現場では、子どもの深い理解はえられない。例えば、朝、元気がなくあそび出せない子どもがいたら、朝食は？睡眠は十分か、そして、保護者は元気なのかなど家で暮らして思いを寄せる。一冊の絵本の世界を子どもと保育者で楽しむ場合、そこに保護者も参加することで、保育の世界の豊かさは倍増する。どんなに日々忙しくても、保護者同士がつながって作り上げられた行事に関わる時、大人も子どもも人として成長するように思うのである。真剣に保育者が「子どもと共に生きる」ことを考えたとき、最大の応援団になってくれるのが保護者であった。だから、保育を子どもだけのもの、あるいは保育者と子どもとのかかわりのみのとらえ方では、もったいないように思うので

ある。保護者の保育への主体的な参加によってこそ、「子どもの主体的な生き方」が大事にされ、子どもの豊かな育ちが保障されるのではないだろうか。

もちろん、榎沢・中坪も保護者との連携の重要性、そして子ども理解の際の保護者との「共同」の重要性に言及している。だが、両者の議論では、子どもとの関係が中心に位置づけられているのに比べると、保護者との関係は中心にあるというより、「周辺」に位置づけられているように思われる。例えば、榎沢^[1]は、「他者との共同により子ども理解を深める」ことについて「保育実践は保育者個人が行う孤独ないとなみではない。保育実践は子どもたちや他の保育者たちとの共同のいとなみである。さらには、保護者との連携も必要である。このように、保育は人間同士の協同性の下でなされるものであり、その協同性のありようが保育の質を左右している。その意味で、保育実践にとって協同性は不可欠な要素」と述べている。ここであげられている共同性には、残念ながら保護者はあくまでも2次的存在であり、主体的な位置づけは感じられない。

第二に、両者の議論に共通する特徴は、保育におけるさまざまな人と人のかかわりが、ある望ましい目的や関係へと発展し収束するものとして描かれているという点である。

例えば、保育者と子どものかかわり場面においてではあるが、中坪^[2]は、一方で保育実践における出来事や事象の「一回性」について触れつつ、他方で、保育の「計画的実践」の必要性を指摘している。一回性の出来事とは事前の予測が困難なものを指しているにもかかわらず、保育においては計画的な環境構成が必要だという。保育実践には、「一回性」的性質と「計画的」的性質が併存しているのは明らかだが、「一回性」的性質のハプニングさえ楽しむ保育が展開される時、保育者としての醍醐味を感じることができた。保育の「計画的実践」において、保育者の意図、ねらいの枠内での子どもの自由、自発性を育てることにならないだろうか。計画的な環境構成においては、基本的なところで保育者主導であり、その環境さえ子どもとともに作りだす保育を思えば、保育者と子どものかかわりのあり方に違和感を覚える。

また、保育者としての経験を重ね、保育園の保育全体を見渡せるようになればなるほど、「一回性」、つまり予期されぬ、あるいは計画された目的が達成されないようなハプニングや「失敗」から学ぶ力量を要求されるように思われる。

それゆえ、保育実践論として、単に両者を併記するのではなく、実践のダイナミズムもしくは、意外性や変化を本質とするものとしての実践という把握が必要なのではないかと考える。

また、保護者とのかかわりについて、榎沢^[1]が「連携」や「支援」という形で言及している点についても——ごく一般的に用いられる表現ではあるが——いわゆる予定調和的な親密さをますことや子育ての価値観・方法の一致へと収束するものとして描かれているように思われる。そこには、保育者側からコントロールすることが可能という前提があるのではないかと感じられ、保護者の主体性が大事にされていないようにも思われる。例えば、保育者の実感としては、保護者が本音を言い、忙しい日々の中でも、子育ての場である保育園にかかわり、子育てを楽しめるようになってほしいと願ってきた。「連携」や「支援」ということばでは表現しきれない人と人との関係を育て合いたいと思ってきた。子ども、保育者、保護者三者が主体的な立場でかかわりを持つときに生まれるエネルギーは確かにある。それは、保育のおもわぬ展開を生み、真に保育をすすめる原動力となったのである。

第三として、保育者の専門性について述べておきたい。

榎沢^[1]は、保育者の専門性について、「保育所保育指針においては研修や自己研鑽により専門性の向上に努めることが保育者には義務づけられている。人間性と専門性は保育者にとっては不可欠な要素」としている。そして、保育はマニュアルの域におさまるものではなく「保育者の成長は、単に技術の習得や知識の量の問題に留まるのではなく、生きている世界そのものが豊かに変化すること、保育世界の豊かさがより細やかに見えるようになることを意味している」と述べている。すなわち、人間性を重視した、保育者の専門性の深化こそが大事だと述べているのである。中坪^[2]は、「保育者は、保育実践と省察を通して、保育の中の一回性の出来事のひとつひとつを解釈しながら、自

らの課題解決のための思考を積み重ねているのである。」と「省察」の重要性を述べている。

一般的な「専門性の深化」というとらえ方には、何か欠けているように思う。リアル保育者が動き出さないのである。変化しない、一般的な正解があり、非歴史的で獲得すべきものがすでにある問題の設定となっているのではないだろうか。結局マニュアルの域をでないものになっていないだろうか。実際の保育場面では、その時の状況によって求められる対応は変わるのであり、静的固定的なものではなく、絶えず状況的に変化するものであり、歴史的社会的な面をもっている。

保育者として、保育現場に立つ時、子どもとその生活環境を切り離すことはできない。中坪は、「保育実践と省察は、保育者にとって子ども理解や環境構成の更新をもたらすとともに、探求的態度の形成を促すのであり、それによって保育者の専門性の発達や保育の質の向上につなげることができる。」としている。この場合の「環境」とは狭い意味での保育環境であろう。中坪が事例として引用しているA男とB男（5才児）のトラブルへの対応としての保育実践と関わって考えてみたい。

まず、このトラブルに関する理解の仕方について、家庭生活で困っていることはないのか、5才児が子ども同士でぶつかり合いながら育ち合っている姿ではないのか等の問いかけはなく、施設環境の狭さ、保育環境へのマンネリ化が原因としてとらえられている。36人という大人数のクラス規模も気になるところである。また、トラブルは友だちとの関係をより深めるきっかけともなる。その時の気分を変えるだけの保育になるのは、残念なことである。「めっきらもっきら どおんどん」は、子どもたちに人気の絵本であり、筆者も子どもたちに読み聞かせ、ごっこ遊びを展開したことがある。子ども同士で絵本の登場人物の世界をじっくり味わうことの中にも、子どもたちの豊かな育ちはある。単純な妖怪遊びに還元するにはもったいない教材でもある。そもそもこのように限定されたなかで、子ども理解は深まるのだろうか。

そして、保育者の人間性を問う前に、あまりにも過酷な保育者の処遇、職員配置問題を考えて、子どもが育つ場所こそ、人間的な保育現場であってほしいと願わずにはいられない。保育者の人間性をも育ち合えるようであってほしいものである。本来、研修は「義務」なのであろうか。保育者としてのやりがいとして保育を追求したいと考える時、自ら学びたくなるものなのではないだろうか。そうしたとき、研修は基本的に自主的なものであり、「権利」として保障されるものであって欲しいと考える。

(2) 歴史的社会的視点に立つ保育実践論——清水玲子「親と保育園の関係～これまでとこれから～」^[3]

前節で取り上げた榎沢・中坪らの保育実践論には、①保護者の主体的な位置づけ、②関係のあり方、③保育実践は変化するもの、という視点が欠けていた。保育実践を歴史的・社会的な変化の中で変化発展するという視点からの保育実践論として、清水論文を取り上げることにする。

清水は、「昔もいまも、このテーマほどその関係をよくすることの重要性がくり返しいわれているにもかかわらず、なかなかうまくいかないものも少ない。」と書き出しているが、「親も保育者もそれぞれ不満や要求をもちながら、それを率直に、前向きに語り合うという一歩が踏み出せていない」「特に全国の保育問題研究会（保問研）の研究運動のなかでどのようにとらえられてきたのかを振り返りながら、問題を考える糸口をつかみたい。」と1960年代から1990年代の親と保育園の関係の変遷をまとめ、分析している。

1) 1960年代——歴史的に変化・発展する保育実践

1962年、第1回全国集会在開催され、翌年の第2回全国集会で分科会「父母との連携をつよめ、地域の運動をどうすすめるか」が開催された。その後「保育者や母親・研究者の生活条件および組織について」の分科会になる。第5回集会（1966年）では、第Ⅲ分科会「保育者の当面の要求とその運動をどう進めるか」の②「保育者は父母とどう協

力するか」というテーマで話し合われた。親と保育者の関係を「保育所づくりや保育条件改善の運動をともにすすめる仲間として」とらえ、「保育の方法や内容、園の運営まで含めた相互理解をめざす」「それゆえ、ただ協力し合える関係として収まりきれない意見のくい違いを正面から見つめていこうとした」と述べている。保育運動の中で保育者と父母の信頼関係がつかれていっている報告が多数あり、「“親は預けっぱなしにする” また逆に“子どもを人質に取られているようで保育園にはっきりものが言えない” といった発言もあり、研究集会で正面から討議をしたことは画期的なことであった。」としている。

そして、この力量は、「共同保育を生み出し、それをベースとして保育所づくり運動をともにとりくんでくるなかで培われてきた」ものであると述べている。

以降の分科会について下記のようにたどっている。

第6回全国集会（1967年）の分科会で「保育者と父母の要求をいかに統一していくか

①どこで対立するのか。 ②どういう子どもに育てようとしているのか。父母の生活に根ざした保育を。 ③要求の統一、保育運動を発展させるためにどこから始めるか」などが討議された。第7回全国集会（1968年）では、「父母と保育者の連携」臨時分科会が開かれ、多くの幼児教育・保育の場で、父母と保育者の結びつきが断たれ、一言話すことがとても勇気のいる現状の中で、それでもまず保育者が父母に話しかけ、信頼関係をつくっていくこと、どちらかにしわ寄せする形でお互いの要求を解決するのはやめて、真の解決を共同で考えていくことが大切であることを確認した。

まさに、60年代は、「ポストの数ほど保育所を」という保育所づくりの国民的大運動が展開された時期であり、共同保育所運動の歴史にも見られるように、保育実践の役割、課題は変化してきたのである。

2) 1970年代から90年代へ——保育実践の変化の時代

第14回全国集会（1975年）では、長時間保育児のこと、子どもに合った生活時間を父母と保育者が一緒に考えていくことの問題提起もあったとしている。

「1980年代に入る頃には、子どもの発達に問題がでてきていることが指摘されはじめ、子どもの育ちを保障できない親たちの生活や意識をなんとかしなくてはならないという危機感」をもち、保育所が、「地域の子育てセンターになっていく必要性」が語られ、「子どもの生活リズムの乱れや食生活のかたより、さまざまな生活経験や人間関係の貧しさに危機感を持ち、親を目覚めさせていくことの重要性」が強調された。

第23回全国集会（1984年）に作られた「父母と共につくる保育内容」分科会の報告は、「親の要求を具体的に受け止め、考えあっていく姿勢をはっきり打ち出した貴重な報告であった。」と評価し、以降、子どもがまともに育たなくなっているのではないかと、という子育てに対する危機感は、しっかりした生活を子どもに保障していくために、保育園でもがんばるけれど、親たちにがんばってもらう、親たちにわかってもらうという姿勢を保育者たちの間につくっていった、と述べている。第28回全国集会（1989年）の分科会では、父母も保育も子どものことでは一歩もひかずに「せまり合う」体質をつくってきた、との記述もあり、「子どもを大切にするためには父母を教育していかなくてはならない」という意見もあったことを述べている。浦辺 史氏の発言——①家庭と園との人間関係を平らなものにする努力 ②核家族時代に育った子育てを知らない親に、子育ての科学を伝えていく子育てセンターとしての保育園のあり方を求めていく努力 ③保育園は保育内容をきちんと親に示して共に育てる立場に立つ努力——を紹介し、保育現場の戸惑い、保育実践のありようを模索する様が見られる。

第29回全国集会（1990年）の基調提案では、子育てのさまざまな新しい困難のなかで親の願いを受けとめていくことの大切さが強調され、「保育者と父母が手を結びきれずに悩んだり、両者の価値観の違いからズレやトラブルを起こしたりしていることを受けとめ解決のために努力すべきであることを明らかにしながらも、父母と共につくる保育が、新しい地平を開きつつあることに確信を持っていくことを呼びかけている。」としている。

第31回全国集会(1992年)では、「保育者と父母がわかり合っていくためには、園での新しい努力が必要」とされたが、「子どものためにもっとがんばろう、と親に働きかけていっても、その内容や保育者の気持ちがなかなか親には伝わらない。」という悩みを次のような発言から読み取っている。

- 親の気持ち、生活を見て、おしつけでなく、まるごととらえて共育ちをする大切さ。いいことではあっても生活にすぐわないことをやっけてはいけない。
- 子どものところから出発。あるべき論でなく子どもの育ちの状況をおさえ、親の現状から出発していく。つきおとのではなく支え合って。

さらに、「1980年代には、子育ての困難がクローズアップされ、それを乗り越えるために親を親として育てること、教育することが課題として強調され、父母とともに行事をつくる実践などが多く生み出された。90年代に入ってから、その方法の検討(親に対しておしつけになっていないか、こうあるべきという理想を要求しているのではないか)を通してもっと親の実情から出発して、親によりそっていくことの大切さが確認されつつある」と述べている。そんな中、「埼玉鳩ヶ谷市の保育園の保育運動の中で結びつきを強めていった過程と大阪いづみ保育園の“実家のような保育園”をめざす努力に見られる“親の本音を心から大事にしていこうとする立場”は保育界を驚かせ、「親と保育者の関係についての議論を大きく転換させた。」と述べている。

そして、この実践を「新しい関係のあり方の問題提起」と意味づけ、新たな子育ての困難、矛盾の中で、その解決のために次のように今後の課題をまとめている。

保育園はみずからの役割を、時代の中で親の切実な要求と切り結びながら常に模索し、見いだしてきた。それは、親と園の関係についても、お互いに対等な関係のなかで共同していく方向をめざすものである。…現実にはさまざまな困難がでてくるが、そのときそのときに悩みつつ解決を求め、その力量を高めてきている。…新しいかたちでの生活の厳しさが保育者にも父母にも重くのしかかってくるなかで、ほんとうに父母と保育者がともに保育内容をつくっていくとはどういうことなのか、いまある現実をいねいに見つめ直す必要がある…保育園での子どもたちの生活が、子どもを育て、見守る大人たちの共同の願いと知恵によってどのように展開できていくのか…みんなであらゆる課題での実践をつみかさねていくこと。

このように見てくると、次の三点に清水の見解をまとめることができる。

- ① 歴史・時代の課題に立ち向かうことによって保育実践は発展する。
- ② その課題に向かう時、保育者と保護者との共同する関係こそが重要である。
- ③ 保育実践の全体性から「転換」する。

3、目的と方法

(1) 本論の目的

先行研究から保育実践は以下のような本質を持つものとして捉えることが、そのリアリティーを描き出すには必要不可欠であることが浮かび上がってきた。

すなわち、第1に、実践は歴史的、社会的変化の影響を受けて全体として変化するものであること。第2に、人と人とのかわり方、その性質の変化という形で「転換」する。第3に子どもとの関係に限定されることなくあらゆる関係が原動力となって変化する。これらの仮説を、実際の保育実践に即して検証することが本論の目的である。

(2) 方法

1990年代は、全国的に広く、子どもの発達に気になる変化やこれまで経験したことがない変化が現れたという報告が増えた。また、家庭の生活状況や子育てに変化が見られ、保育園での保護者との連携や協力関係の構築が以前より

困難になっているという報告が目立つようになった。こうした中で、保育実践の見直しの必要性を感じる保育園が生まれてくる。この90年代の社会的な変化を踏まえ、保育実践の見直しや再検討に園全体で取り組んだ保育実践事例を取り上げ、そこでの保育実践の再検討がどのような形で進んでいったのか、何が原動力となって変化が生じていったのかを検討する。

そのことによって、本論の目的である、人間関係総体の変化・発展するものとして保育実践をとらえるという仮説がどこまで妥当するか、有効かを検証することとする。

具体的には、東京・東久留米市のひばり保育園と、愛知県・名古屋市のけやきの木保育園の実践を、公刊された実践記録を素材にして分析を行う。この二つの園を取り上げたのは、以下のような理由からである。両園とも、決してその時々での社会的状況から目を離さずに園づくりが進められてきた。ひばり保育園は、保護者と共に園建設をスタートさせ、民営化の委託園ともなってきた。けやきの木保育園は、公立保育園の民営化の受託園として、新たな人間関係づくり、園づくりを進めてきた。そして、その時々での保育課題に職員全員で話し合いながら向き合い、保育者、子ども、保護者の三者を大事にする保育実践をめざしてきた。さらに、園における人間関係を発達の視点で、変化発展するものとして見つめている。このようなことが、筆者の保育者としての実感に重なるものであることも、これらを取り上げた理由とも言える。

第2章 保育実践の「転換」について

全国の自覚的、代表的な90年代の保育実践の変化の分析のための素材として、全国保育問題研究集会「父母と共につくる保育内容」分科会96年・97年報告、97年提案および埼玉のひばり保育園、名古屋のけやきの木保育園の実践を取り上げることにする。

1、「転換」前の保育（親にせまる保育）と「転換」後の保育（親の本音を大事にする保育）、それぞれの保育実践の特徴について

1) 全国保育問題研究集会「父母と共につくる保育内容」分科会報告1996年^[4]と1997年分科会報告^[5]から

96年分科会報告では、分科会の10年の経過をもとに、保育園保育の基本について、「保育現場での姿のみで子どもを捉えるのは基盤のない保育である。子どもの背景には親の生活があり、子どもはその影響を受け育っている。発達の促しには、子どもの24時間の生活を視野に入れ“親と共に考える”が保育の原点である。父母からも「かくあるべき」論だけでなく、親の現実を園から受け入れられた時、肩の力を抜き子どもと対応、前に進むことが出来たとの思いが寄せられた。」と報告されている。

また、97年分科会報告でも、下記のような報告がされている。

- ① 子どもと親の生活、仕事の実態を受け止める保育をすすめたい。
今、保育園生活をすすめるのに、親の考え、意向に沿うことが最も大切な課題になっていることが多くの発言から確認された。
- ② 父母と保育者が力を合わせて子どもたちの育ちをよるこび合う。
会議をしたり物を作ったりする中で親睦を深め、何でも言い合える関係になっていく。そうした行事の内容にも親の要望を取り入れることの大切さが出された。
- ③ 地域に果たす役割を理解する。
親の理解を得られるか、共に取り組めるか…が課題になっている。
- ④ まず保育者が乗り越えたいこと。
“保育のむずかしさ”“わが子の育ち（保育者自身の子育て）”をどう乗り越えるか。そして、保育者はなんといっても、親を受け止め支えていく立場にあることをわかり合う学習、職員の集団づくりが必要なこと、経験などが出された。

97年分科会提案「保育を見直す中で」（京都保問研・白い鳩保育園）^[6]では、

「ミルクの量を増やす保育者と親のやり取りから、保母の思いを一方的に言うのではなくまずはお母さんの『肥満にたくない』という想いを受けとめ、実際のTくんの姿からどうするのが一番いいのかという事を共に見つけていったことが良かったのではないかとあるように、「かくあるべき論」で親に園から迫っても、なかなか伝わらない現実があり、そこに実践者としてどう切り拓いていったのが語られたのである。ややもすると、親にせまる保育となりがちなところを、親、子どもの現実に立ち返りながらすすめていったこの時代の典型的な実践として取り上げられている。

2) ひばり保育園 (1998年)^[7]、けやきの木保育園 (2012年)^[8] の実践から

ひばり保育園が大事にしてきたことは、下記のようなことである。

何年も前からの「実践・総括・方針化」の繰り返しの中で、少しずつ合意してきたもので、

- ① 保育をめぐる情勢をとらえて保育園の役割を明らかにすること。
- ② 父母とともに作る保育(共育)を大切にしたい。「父母と横に並んで子どもを見つめる」こと。子どもの姿を伝え、共に見る目を育て合うこと。
- ③ 人間への信頼の基礎をつくること。
- ④ 保育の裾野の生活を豊かにすること。子どもを保育園生活の主人公にし、大人と子どもと一緒に暮らし合うという感覚で、その暮らし方について一緒に考えられるといい。
- ⑤ 保育実践を深め合うことのできる保育者の関係づくり。①～④を支える大人の間関係のあり方。

「子どもの育ちの実態を親の労働や生活の反映としてみる側面、子どもの姿の中に私たちの保育を問い直すという側面、この2つの側面から子どもを捉えるようになったことで、子どもの心や体がバラバラになっているのは、大人の間関係がバラバラにされたり、複雑な人間関係、安心して自分が出せない、よりどころのない人間関係であったりすることに起因しているのではないかとつかみ直し、大人の間関係を豊かにするという視点で、保育実践を深めている。

「子どもたち一人ひとりをしっかりつかみ、どの子も安心して自分を委ねられる大人との関係をつくること、また、仲間のなかでどの子も存在感がもて、本来のその子らしさが発揮でき、互いに認め合える関係にしていくこと」、「子どもが安心して自分を委ねられる、大人も安心でき自分が出せることが大切。保育者同士、父母と保育者、父母同士の暖かい人間関係をつくることを大切にしたい。」と述べられている。

「父母との関わりを語ろうと思えば、職員同士の関わりを抜きにしては語れないし、目の前の子どもの姿を語ろうとすれば、社会情勢をどう見るかを抜きに語れない。」とあるように、多様な関係性のもとで、人間関係は発達すると捉えられている。

「30数年前、我が子のことを大事に思っている父母と出会い、保育条件の貧しい時代で、子どもたちのために何かできることはないかと、たくさん力を貸してもらいましたし、また、支えてもらわないと出来なかったかもしれません。そんな中で、自然に保育園の保育と一緒に考えるという風土が作られた。」とあるが、1960年代のことであろう。そして、そんな親たちによる保護者会の活動が子育てに関わる制度を作ってきたのだとも述べられている。10年前(1988年)の「民間委託」の中で「各々の園の独自性や自主性を尊重することの大切さ、園の保育は、父母と保育者で考えることを再確認させることになるなど、父母と保育者がつながることの意味合いが深められた」と振り返っている。

このことは、清水の言う「保育園はみずからの役割を、時代の中で親の切実な要求と切り結びながら常に模索し、見いだしてきた。それは、親と園の関係についても、お互いに対等な関係のなかで共同していく方向をめざすものである。」ことに合致している。

「父母と一緒に行事をつくる。いつもその中心に子どもがおかれています。いつも子どもに立ち返るという視点。その時代時代の父母と保育者が、その時代の子育てに関わる客観的な要請に応える形で考え、そこに存在する人々の個性を発揮してつくりだす行事の内容ですから、それぞれの園で独自性があり、特色がある」と園の独自性について説明している。『『父母と保育者で行事をつくる』という方法を継承し、発展させてきたそのプロセスには、どの時代も、乗り越えなければならない問題がいつも横たわっていました。それは、社会的背景や、父母の労働実態が起因する場合と、素朴な父母としての疑問が問題を投げかける場合とがありました。』として、「仕事をしていて忙しいから子どもを保育園にお願いしているのに…」と保護者会のために時間を割くことへのくり返される質問のことが述べられている。現在でも、日々保護者から投げかけられる質問である。そんな中、「一緒に何かすることで『ねえ！先生』と声をかけてくれるお母さんとの親しい関係ができ、子どもを共に育てながら、父母も保育者も育ち合うことが出来る、この実感こそが困難を乗り越える原動力」となり、歴史を作ってきた保育者たちの熱い思いを感じとることが出来る。

嶋は、大阪のいづみ保育園の「親と保育者が横に並んで子どもと向かい合う」という言葉に出会い、「新しい視点」ととらえている。園を信頼できないでいる父母、親子関係の希薄さ、食生活の問題など、子育ての基盤になるような部分が揺らいでいると感じ、日常の関わりにおいても、父母とうまくかみあわなかったり、父母の期待に応えられないという悩みが出され、くり返し、子ども、父母、私たちを取り巻く状況を学び合い、子育ての困難は個別の親の問題ではなく、急激な産業構造の転換期にあって、みんながその影響下にあるという思いを共通にして、父母と共感し合い励まし合える関係を父母同士の支え合いに励まされてつくってきたことを語っている。

子育ての困難さにおつかり、父母と保育者の関係を見直さざるをえない状況の中でこそ、「親と保育者が横に並んで子どもと向かい合う」関係の意味づけがはっきりしてきたのではないだろうか。そして、「子どもの内面の深いところを理解する努力がはじめられ、父母に保育をどう伝えるかが課題となってきた…みんなに見えるやりとりのなかで、一緒に考え合う網の目を厚くし、今の時代にふさわしい『一緒に見つめる』意味を深めたい」と、対話的關係を深めていったのである。

子どもたちにとって、親たちにとって、保育者たちにとって、という三者の願いを共に前進させ、それぞれの関係のあり方がかわって、保育実践は全体として変化発展していったことを私たちに伝えている。

それから、ふた昔ほど過ぎての2010年代のけやきの木保育園の実践では、社会状況が悪化の一路をたどり、子育ての困難さが進み、保育の福祉的役割が増す中での保育実践が語られている。まさに、下記にあるように保育者の悩みは、同じなのである。いいえ、より深刻になっているといえる。

向かい合いから横並びの関係へ

向かい合って、ぶつかって、子どもを真ん中にした「向かい合いの子育て」も、ほんとうに意味深い保育のありようだとは思いますが。でも、ウン十年それでやってきたベテラン保育者たちが、近年親たちと「思いを伝えてもなかなか共感がしてもらえない」「わかりあえない」で、苦しい話も良く耳にするようになりました。…

平松は、さらにその関係性を「(保護者と保育者が)向かい合って、ぶつかって、子どもを真ん中にした『向かい合いの子育て』も、ほんとうに意味深い保育のありようだとは思いますが。理解し合う営みは、どちらかが『ガマン』することではありません。『何とかこの苦情に対応しなきゃ』と思っていたときは、『クレーム対応』で『説得』になりがちだった私たちですが、その背景にある思いに心を寄せ、『共感』『理解』するようになると、逆に楽になることを知りました。向かい合いでの対応ではなく、横並びで、正面には『子どもにとってよりよいこと』のゴールを見据えることができるからです。」と述べている。

(嶋)「一緒に何かすることで『ねえ！先生』と声をかけてくれるお母さんとの親しい関係ができ、子どもを共に育てながら、父母も保育者も育ち合うことができる、この実感こそが困難を乗り越える原動力」、(平松)「(親の)その

背景にある思いに心を寄せ、『共感』『理解』するようになると、逆に楽になる」とそれぞれに保育者としての親と共に子育ての困難を乗り越えるための原動力について語られている。

2015年4月から子ども・子育て支援新制度がスタートし、保育への企業参入が進められる。平松は、親は子育ての「仲間」であり、パートナーであること、親たちの声を受け止めつつも、おもねることではなく「理解」しあう関係だと述べている。親の希望優先で、子どもの発達の保障が軽視されているような企業保育への懸念が含まれている。そして、「子育てのパートナーは、親たちが園に求めるだけではなく、保育者たちも親たちを求めている。我が子が園で大切にされていることを実感できる時、親たちは保育園にとってかけがえのない応援団になってくれる。」と人間関係の発達していく姿をとらえている。

そして、親へのまなざしを次のように述べている。

誰だって、はじめて向き合う「子育て」という営み。やってみなければわからないことばかり、おまけに正解なんてどこにもない、とにかく自分とわが子との真剣勝負です。そこにあるのは、「この子が愛おしい」「この子が幸せになってほしい」という親としての願いです。

…これが、「仲間」・パートナーとしての親との向き合う姿勢なのではないでしょうか？

こちらのいうことだけを守ってくれる親像を求めると、「どうして～してくれないの?」「なんで、あの親はこうなの?」という態度になってしまいますが、その人をまず理解して共感できることは、保育で子どもを理解し、共感を育てることをしている私たち保育者なら、最も得意な分野だと思います。

「3年目の卒園式の夜…初めての卒園式後の打ち上げに職員も誘ってもらい、深夜12時ちかくまで店をはしごして父母と飲み語りました。…よかったね、職員たちよ。どの父母も『けやきの木ってさあ』と、口々に語ってくれるありがたさ。」という平松の心からの声に、筆者も共感し、保育者としての未来へのエネルギーとなってきた実感がある。

「肩ひじ張る保育から、『保育は親とつくるもの』という考えを知ってからは、親たちの声を聞くゆとりがでてきました。今の子どもの姿を、わが子だけでなく、友だち集団も含めて何でも伝える。いいことばかりでなく、手を焼く姿も頭を抱える姿も親たちにわかっていってもらう。すると、親たちはわが子だけでなく、わが子の仲間の成長も共に喜んでくれるようになりました。担任の自分だけが保育をしているのではない、親たちも一緒に考えてくれることが、とてもうれしかったのを思い出します。」と平松自身の実感を述べている。

そして、「人と人との心地よい関係づくりが保育園を超えて発信できれば、どれほどこの社会が過ごしやすくなることでしょうか。『保育で社会は変えられる』と言いたい。」「私たちは『保育者』です。人間発達援助の専門職です。だから、子ども理解のプロフェッショナルでありたいと思います。子どもと同じように、大人理解のプロでもある。」と保育者の役割、専門性について述べている。

2つの著書は14年もの時を経ているが、公立保育園の民営化の中で、委託園（ひばり保育園）、受託園（けやきの木保育園）ともなった。地域、立場は違うものの、時代の嵐の中で、保護者と保育者が本音できびしくぶつかりあいながら、モデルB（親の本音を大事にする保育）を深め、共同して保育実践が行われてきたこと、多様な関係性の発達のなかで保育実践が変化発展してきたことを私たちに伝えてくれている。

2、「転換」前の保育実践（親にせまる保育）と「転換」後の保育実践（親の本音を大事にする保育）のモデル化——

「転換」前の保育実践（親にせまる保育）をモデルA、「転換」後の保育実践（親の本音を大事にする保育）をモデルBとすると、その特徴は次のような一覧になる。

	モデルA 「転換」前—親にせまる保育	モデルB 「転換」後—親の本音を大事にする保育
①保護者と職員 の関係	「かくあるべき」論 保育園の考え方を先に聞いてもらう 向かい合って、ぶつかって、子どもを 真ん中にした「向かい合いの子育て」 向かい合いでの対応 ガンバリズムの要請	まず親がいるんなことが聞けたり想いが言えたり雰囲気、関係づくり 何でも言い合える関係に 行事にも親の要望をとり入れることの大切さ 親のちょっとした一言にでもお互い共感し合えば自然に笑いが… 父母と保育者が横に並んで子どもを見つめる 横並びで、正面には「子どもにとってよりよいこと」のゴールを見据える ことができる 保育者たちも親たちを求めている 我が子が園で大切にされていることを実感できる時、親たちは保育園に とってかけがえのない応援団になってくれる 「対話的關係」結論を一方向的に与えない。他人の意見を聞くことで、考え を深める。初めから否定的に他人の発言を遮らずに辛抱強く聞く。他人へ の尊敬。意見を交わすことによって共同で探求することが出来る。
②保護者・親像	子どもの生活を優先した生活をすべき 親と園との個別対応になりやすい	子どもと親の生活、仕事の実態を受け止める保育 親の考え、意向に沿うことが最も大切な課題 父母と共感し合い励まし合える関係を 親集団の育ち合いに注目 職員とともに保育を作る「仲間たち」 親たちの声はとても大切に受け止めながらも、おもねることではなく「理 解する」営みが双方にある関係
③保護者との関 わり方	肩ひじ張る保育 「朝はしっかり食べさせて…」 「子どもにはこんな接し方を…」 など要求が多い 「子どものためにはこれが最善」 「早く寝かしてくださいね」「頑張っ てね」「子どもたちにこうしてくださ いね」— 脅迫的言葉が多い クレーム対応 — 説得型 「対応」、「支援」	父母同士の支え合いに励まされて親を受け止めるその中から、自分の生き 方も重ね合わせていく、子どもの育ちも見えていく、そこから保育園の生活 づくり、内容をつくっていく 親たちの声を聞くゆとり 担任の自分だけが保育をしているのではない、 親たちも一緒に考えてくれる 子育てのパートナーは、親たちが園に求め るだけじゃない。保育者たちも親たちを求めている。 「子どもにそれがいいのはわかっているけど、出来ないのよ」 どうすれば日課を整え、その日課で登園した子どもたちが豊かに遊べるよ うな保育をつくれるのかを、親たちと一緒に考える クレーム対応 — その背景にある思いに心を寄せ、「共感」「理解」する 「対話を」
④職員関係	「頑張り集団」になりがち	会議は共感し、確かめ合う場 SOSが出せる風土 いろんな職員がいるから面白い
⑤子ども親	子どもの発達保障の視点 保育現場での姿で子どもを捉えがち	子どもの発達保障の視点 24時間の生活を視野に入れ “親と共に考える”
⑥3者の関係	子どもにとってが最優先課題	子どもたちにとって、親たちにとって、保育者たちにとって、という三者 の願いを共に前進させるかどうか共通の視点 大人の間人間関係を豊かに するという視点 人と人との心地よい関係づくり
⑦めざす保育実 践の姿	子どものかっとうにつきあいながら も、目的ありきになりやすい 子どもを発達の主体者にしきれない	「子どもたち一人ひとりをしっかりつかみ、どの子も安心して自分をゆだ ねられる大人との関係をつくること、また、仲間のなかで、どの子も存在 感がもて、本来のその子らしさが発揮でき、互いに認め合える関係にして いくこと」 子どもたちは様々な心のかっとうをくり返しなが、大人や仲間たちが 「わかってきている」「認めてくれている」安心感と心地よさをよりどこ ろに、「こうなりたい自分」に向かって今を乗り越えていく。子どもは発 達の主体者

3, モデルAからモデルBへの「転換」はどのようにして起こったのか

1990年代の社会状況と密接な関係があるのではないだろうか。

この時期、「学級崩壊」「キレる子」「荒れる子」がマスコミ報道のなかでもキーワードとなった。子どもも親も厳しい追い込まれた状況にある中、子どもの発達保障の視点を持ちつつ、「大人の間人間関係を豊かにする」、「人と人との心地よい関係づくり」を大事に考えるという視点から見れば、モデルAからモデルBへの転換は、今にして思えば当然の成り行きのようにも思える。

しかし、実際は、自然に保育が変わったわけではない。子ども、親、保育者が日々暮らし合う中で、ぶつかり合い、「かくあるべき論」で親に園から迫っても、なかなか伝わらない現実があり、そこを実践者としてどう切り拓いていくかが問われた。ややもすると親にせまる保育となりがちな、子どもを真ん中にした「向かい合いの子育て」から父母と保育者が横に並んで子どもを見つめる「横並び」の関係へと、人と人とのかかわりの変化という形で「転換」したのである。そして、親、子どもの現実に立ち返りながら保育実践をすすめていくなかで、全体的に関係そのものが変化していったのである。

この時、保育は、あきらかに子どもとの関係だけで捉えることはできない。あらゆる関係が原動力となって「転換」したといえるのではないか。モデルAもモデルBも時代の中で、真剣に取り組まれた保育の姿であることはいうまでもない。

第3章 考 察

第1章の先行研究から浮かび上がってきた①実践は歴史的、社会的変化の影響を受けて全体として変化する。②人と人とのかかわりの変化という形で「転換」する。③子どもとの関係に限定されることなくあらゆる関係が原動力となるという保育実践論の仮説について検証してきた。

まず、第2章では、全国の自覚的、代表的な90年代の保育実践の変化の分析をしてきた。

第1の仮説「実践は歴史的、社会的変化の影響を受けて全体として変化する」に関して、検討から明らかになったことを述べる。

私たちは、日々、社会的影響を受けずに暮らすことはできない。全国の自覚的、代表的な90年代の保育実践は、保育も例外ではないことを伝えている。保育実践は、保育者、保護者、子どもたち、三者の共同で成り立つものであり、歴史的、社会的変化の影響を受けずには考えられないものである。そこから生み出される保育課題は、マニュアルに収められるような類いの保育方法で解決されることはないであろう。しかし、これらの実践からわかるように、その時々歴史的、社会的影響に対して、留まることなく切り拓かれていった事実である。保育実践全体として変化していったと言えるのではないだろうか。

次に、2番目の仮説「人と人とのかかわり方、その性質の変化という形で『転換』する。」に関して、明らかになったことは、親にせまる保育となりがちな、「向かい合いの子育て」から父母と保育者が横に並んで子どもを見つめる「横並び」の関係へと、人と人とのかかわりの変化という形で「転換」したのである。そして、親、子どもの現実に立ち返りながら保育実践をすすめていくなかで、全体的に関係そのものが変化していったということが言えるのではないだろうか。現実的に、子育てに困難な事情を抱える家庭は、ますます多くなっている。その時々課題に向き合うときの関係性が問われている。いかに固定化されたかのようにみえる関係性にも、変化発展する可能性があるとも言えるのではないだろうか。

3つ目の仮説「子どもとの関係に限定されることなくあらゆる関係の変化・発展が実践の変化の原動力になる」に関して述べる。

「転換」前の保育実践モデルA（親にせまる保育）から「転換」後の保育実践モデルB（親の本音を大事にする保育）

への転換のしかたは、子ども、親、保育者が日々暮らし合う中で、ぶつかり合い、「心地よい関係づくり」を求めるなかで、全体的に関係そのものが変化していった。この時、保育は、子どもとの関係だけで捉えることはできないことはあきらからかである。子どもはもちろんのこと、あらゆる人と人との関係が原動力となって「転換」したことがわかった。

保育の営みとは、あらゆる人と人との関係性のなかでこそ成り立つものではないだろうか。保育計画があっても、それだけでは実践は動き出さない。子ども、親、保育者三者の共同のもと、予測不可能な、けっして答えの出ていないことに向かうときにこそ、「わくわくどきどきしながら」、保育実践は動き出すのではないだろうか。子どもが「～したい」という生活の中から生まれるおもいに支えられ発達するように、三者がかかわりながら、支え合い、育ちあうなかで、おもいが生まれ、そのおもいが保育実践をつくりだすエネルギーになるのではないだろうか。それはとりもなおさず、保育者としてのやりがいともなっていく。園の「雰囲気」や「空気」のなかにある、居心地のよさに実践を動かす原動力が隠されているのではないだろうか。

本稿において、保育のリアリティーへのアプローチは、まだまだ不十分ではある。今後、筆者の保育実践に具体的に言及しながら、現場の実感がわかるような保育実践の捉え方を深めていきたい。

文 献

- [1] 榎沢良彦, “第1章 保育者の専門性,” 著: *保育学講座4 保育者を生きる — 専門性と養成*, 東大出版会, 2016.
- [2] 中坪史典, “第2章 保育実践と省察,” 著: *保育学講座4 保育者を生きる — 専門性と養成*, 保育学会編, 東京大学出版会, 2016.
- [3] 清水玲子, “親と保育園の関係～これまでとこれから～,” *季刊保育問題研究*, 第159, pp. 58-71, 6 1996.
- [4] 河井雅子 (奈良保問研), “「父母と共につくる保育内容」分科会報告,” *季刊保育問題研究*, 第160, p. 131, 1996.
- [5] 瀬藤みや乃 (大阪保問研), “「父母と共につくる保育内容」分科会報告,” *季刊保育問題研究*, 第166, pp. 118-122, 4 1997.
- [6] 藤原貴美・秋元宏子 (京都保問研・白い鳩保育園), “父母と共につくる保育内容分科会提案「保育を見直す中で」,” *季刊保育問題研究*, 第164, pp. 263-265, 4 1997.
- [7] 嶋さな江+ひばり保育園, *保育における人間関係発達論*, ひとなる書房, 1998年.
- [8] 平松知子, *大人だってわかってもらえて安心したい — 発達する保育園大人編*, ひとなる書房, 2012.
- | | | | | |
|----------------|----------------------------|----------|---------|-----------|
| 全国保育問題研究協議会編 | <i>季刊保育問題研究</i> | 121~288号 | 新読書社 | 1990~2018 |
| 土方康男 | 「保育とはなにか」 | | 青木書店 | 1980 |
| 浦辺 史・宍戸健夫・村山祐一 | 「保育の歴史」 | | 青木書店 | 1981 |
| 津守 真 | 「保育者の地平」 | | ミネルヴァ書房 | 1996 |
| 鈴木佐喜子 | 「現代の子育て・母子関係と保育」 | | ひとなる書房 | 1999 |
| 宍戸健夫 | 「保育実践をひらいた50年」 | | 草土文化 | 2000 |
| 鈴木佐喜子 | 「時代と向き合う保育(上)・(下)」 | | ひとなる書房 | 2004 |
| 大宮勇雄 | 「保育の質を高める」 | | ひとなる書房 | 2006 |
| 全国保育問題研究協議会編 | 「保育で育ちあう～子ども・父母・保育者のいい関係～」 | | 新読書社 | 2009 |

宍戸健夫・渡邊保博・木村和子・西川由紀子・上月智晴			
	「保育実践のまなざし——戦後保育実践記録の60年」	かもがわ出版	2010
大宮勇雄	「学びの物語の保育実践」	ひとなる書房	2010
平松知子	「子どもが心のかっとうを超えるとき」	ひとなる書房	2012
大宮勇雄、鈴木佐喜子	「子どもの学びをアセスメントする」	ひとなる書房	2013
池本美香編著	「親が参画する保育をつくる」	勁草書房	2014
保育学会編	「保育学講座全1～5巻」	東大出版会	2016
大宮勇雄・川田学・近藤幹生・島田一男編			
	「現場の視点で新要領・指針を考えあう」	ひとなる書房	2017